

Title	『日葡辞書』の動物名
Sub Title	Animal names appearing in "Vocabulario da Lingoa de Iapam"
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (Hiyoshi review of natural science). No.34 (2003. 9) ,p.9- 20
JaLC DOI	
Abstract	<p>慶長8年(1603)年に本編,翌年に補遺編が長崎で出版されたイエズス会宣教師編『日葡につぼ辞書』は,3万2千語を収録し,当時の和語を知るための第一級資料である。たとえば,『野菜の日本史』は,『邦訳日葡辞書』を利用して当時の呼称とともに,新たにヨーロッパ人が持ち込んだ数々の野菜を明らかにしている。このような試みは動植物全般に有用であろう。そこで,今回は動物を対象として『邦訳日葡辞書索引』から該当する語を収録,『邦訳日葡辞書』の語釈と解説によって検討・整理した。その上で江戸時代の分類に従って「獣類・禽類・魚類・介類・虫類」の5類に大別し,五十音順に配列したのが次に示すリスト(種名か類名)である。このリストにおいては①広く使われている和語を中心として収録した。たとえば,オシドリについては「おしどり」を選び,「鴛鴦おしどり」の音読み「えんおう」は拾わなかった。また,「獣」・「鳥」などの総称や,想像上の鳥獣名,詩歌語(いなおおせどり=稲負鳥など),婦人語(あかおまな=サケなど)は原則として収録していない。②平仮名の品名は,『日葡辞書』にローマ字綴り方で表記されている和語を,『邦訳日葡辞書』で現代表記の仮名書きに直したものである(リスト以外も同じ)。なお,「魚」の「うお」は口語で「いお」となることがあり,両方の表記が用いられている。③()内は注釈で,片仮名は現和名(平仮名と同じときは原則として省略),「」を付したものは原注の『邦訳日葡辞書』訳を簡略化したものである。また,獣類の「ちす」のようにその獣が現在の何に当たるか見当がつかない場合や,「あおばい」に対する「キンバ工」のように種名や類名を断定しかねる場合は,「?」を付した。必要に応じて,相当する漢字表記や類名を加え,読みやすいように平仮名に下線を付した場合もある。長文の注釈を要するときは,「*」を付し,注記としてリストの末尾にまとめた。④「あおがえる」「あおがいる」など発音上の小差にすぎない語や,「あこや」「あこやのかい」などの類縁語は,一般的と思われる語を先に置き,「・」を用いて併記した。⑤見出し名や現和名には種名と類名が混じているが,大半は「...類」の表示を省いた。⑥初出と思われる語には,波線を加えた。⑦現和名の推定には江戸時代初頭の辞書・用語集・本草書のほか,鳥名は『日本鳥名由来辞典』,魚名は『日本魚名集覧』,貝名は『日本貝類方言集』,それ以外の動物や全般的な検討には『日本国語大辞典』を参照した。</p>
Notes	原著論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20030930-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『日葡辞書』の動物名

磯野直秀[†]

Animal Names Appearing in “Vocabvlario da Lingoa de Iapam”

Naohide ISONO

慶長8年(1603)年に本編、翌年に補遺編が長崎で出版されたイエズス会宣教師編『日葡辞書』(注1)は、3万2千語を収録し、当時の和語を知るための第一級資料である。たとえば、『野菜の日本史』(注2)は、『邦訳日葡辞書』(注3)を利用して当時の呼称とともに、新たにヨーロッパ人が持ち込んだ数々の野菜を明らかにしている。

このような試みは動植物全般に有用であろう。そこで、今回は動物を対象として『邦訳日葡辞書索引』(注4)から該当する語を収録、『邦訳日葡辞書』の語釈と解説によって検討・整理した。その上で江戸時代の分類に従って「獸類・禽類・魚類・介類・虫類」の5類に大別し、五十音順に配列したのが次に示すリスト(種名か類名)である。このリストにおいては――

- ① 広く使われている和語を中心として収録した。たとえば、オシドリについては「おしどり」を選び、「鴛鴦」の音読み「えんおう」は拾わなかった。また、「獸」・「鳥」などの総称や、想像上の鳥獸名、詩歌語(いなおおせどり=稲負鳥など)、婦人語(あかおまな=サケなど)は原則として収録していない。
- ② 平仮名の品名は、『日葡辞書』にローマ字綴り方で表記されている和語を、『邦訳日葡辞書』で現代表記の仮名書きに直したものである(リスト以外も同じ)。なお、「魚」の「うお」は口語で「いお」となることがあり、両方の表記が用いられている。
- ③ ()内は注釈で、片仮名は現和名(平仮名と同じときは原則として省略)、「」を付したのは原注の『邦訳日葡辞書』訳を簡略化したものである。また、獸類の「ちす」のようにその獸が現在の何に当たるか見当がつかない場合や、「あおばい」に対する「キンバエ」のように種名や類名を断定しかねる場合は、「?」を付した。必要に応じて、相当する漢字表記や類名を加え、読みやすいように平仮名に下線を付した場合もある。長文の注釈を要するときは、「*」を付し、注記としてリストの末尾にまとめた。

[†] 〒232-0066 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received, Mar. 8, 2003]

- ④「あおがえる」「あおがいる」など発音上の小差にすぎない語や、「あこや」「あこやのかい」などの類縁語は、一般的と思われる語を先に置き、「・」を用いて併記した。
- ⑤見出し名や現和名には種名と類名が混じているが、大半は「……類」の表示を省いた。
- ⑥初出と思われる語には、波線を加えた。
- ⑦現和名の推定には江戸時代初頭の辞書・用語集・本草書のほか、鳥名は『日本鳥名由来辞典』（注5）、魚名は『日本魚名集覧』（注6）、貝名は『日本貝類方言集』（注7）、それ以外の動物や全般的な検討には『日本国語大辞典』（注8）を参照した。

獣類

あざらし	しくま (ヒグマ)	ひょう
あしか	しし* (獅子)	ふた
い* (狢, ハリネズミ)	しょうじょう (猩々)	まく (獾, バク)
いたち	すいぎゅう (水牛)	ましら・まし (サル)
いぬ	ぞう	まみ (アナグマまたはタヌキ?, 「山犬に似た獣」)
いのしし・い (イノシシ)	たくだ (橐駝, ラクダ)	むぐら・むぐらもち (モグラ)
うぐらもち・うぐろもち (モグラ)	たぬき	ら
うさぎ	ちす (? , 「獣」)	むささび
うし	てん (貂)	むじな (タヌキ)
うそ (カワウソ)	とど* (アシカ?)	もま* (モモンガ?, コウモリ?)
うま	どひょう (土豹, モグラ)	やかん (野干=キツネ)
おおかめ (オオカミ)	とら	やぎゅう (「ヤギ」*)
かのしし (シカ)	どりゅう (土龍, モグラ)	やまいぬ (「オオカミ」)
かわうそ	にく (カモシカ)	らっこ
きつね	ねこ	りす
くま	ねずみ	ろとう (駱駝, ラクダ)
こま (ウマ)	のねずみ	ろば
さい (犀)	ばく (獾, バク)	
さる	ひつじ	
しか	ひみず (ヒミズ, 「鼠に似た小動物」, モグラの類)	

禽類

あおくび (マガモ)	いしくなぎ (セキレイ)	おうむ
あおさぎ	いすか	おおたか
あおじとと (アオジ)	いそつぐみ (イソヒヨドリ)	おげら (オオヨシキリ, 「騒がしい緑色の鳥, 東国に多い」)
あかがしら (カモ類)	いぬわし	おしどり・おし (オシドリ)
あじ (トモエガモ?)	いんこ	おながどり (オナガ?)
あしかも (マガモ?)	う (鶺鴒)	が (鶺鴒)
あしすずめ (ヨシキリ類)	うぐいす	かいつぶり
あつとり (アトリ)	うずら	かささぎ* (アオサギ?, 「薄黒い色をした鷺」)
あひる	うそ	かしどり (カケス)
あまさぎ	うとう	
あめどり (アマツバメ?)	うみすずめ	
いかるが (イカル)	えっさい (ツミ)	

かっこう (カッコウ・ホトトギス)	しゃくなぎ (シャクシギ?, 「鳥」)	のごとり (ノゴマ)
かも	しゃこ* (「漢土の鳥」)	はいたか
かもめ	しょう (兄鷹, オオタカ♂)	はくおう (白鷗, カモメ類)
からす	じょうびたき* (尉鶺鴒)	はくが (白鷺)
かり (ガン類)	しらさぎ	はくがん (白雁)
かりがね (ガン類)	しろづる・しらつる (ソデグロヅル)	はくちょう (白鳥)
かわがらす	しろぼと・しらぼと	はしたか (ハイタカ)
かわせび (カワセミ)	しんないつぐみ (しないつぐみ?, ツグミ類)	はっかん* (白鷗)
かわほり (コウモリ)	すずかも	はと
かわらひわ	すずめ	はなすい (花吸, メジロ)
がん (雁)	せきれい	ははちょう* (ハッカチョウ)
かんこどり・かんぼどり (閑古鳥, カッコウ)	せぐろ (セグロセキレイ?, 「小鳥」)	はめき(?, 「カモに似た水鳥」)
きくいただき	せせり (コサギ?, 「川鳥の名」)	はやぶさ
きじ	せんにゅう (センニユウ類)	はわちょう (ハッカチョウ)
きんけい* (錦鶏)	だい (弟鷹, オオタカ♀)	はんしゅつけ・ばんしゅつけ (オオバン?, 「川に棲む黒い鳥で, 頭に白い部分がある」)
くいな	だいさぎ	ひがら
くぐい (白鳥)	たか*	ひしくい
くじゃく	たかあし (「よしすずめ」, ヨシキリ類?)	びしゃご (ミサゴ)
くまたか	たかべ (コガモ)	ひすい (翡翠, カワセミ)
くろがも	ちどり	ひたか (ハイタカ)
くろつぐみ	つぐみ	ひたき (ヒタキ類)
くろづる (含ナベヅル?)	つぐり (タカ類)	ひばり
くろとり (クロガモ?)	つちくればと (キジバト)	ひよどり
けらつつき (キツツキ)	つつどり	ひわ
けりけり (ケリ)	つばめ・つばくら・つばくらめ (ツバメ)	ほおじろ
ごいさぎ	つぶくら(?, 「鴨に似た水鳥」)	ほととぎす
こう (コウノトリ?, 「大きな鳥」)	つみ	ましこ (マシコ類)
こうむり (コウモリ)	つる	まじろだか(?, 「白い眉毛をもつ鷹」)
こがも	てらつつき (キツツキ)	まなづる
こがら	てりうそ (ウソ♂)	まめどり (イカル)
こたか (ハイタカ)	と (?, 「ある大きな鳥」)	まめまし (イカル, 「まめどり」)
このり (ハイタカ♂)	とう (トキ)	みさご
こまどり	とうばと (搭鳩, ドバト)	みそさんざい・みぞさんざい (ミソサザイ)
さぎ	どうばと (堂鳩, ドバト)	みみずく・みみつく (ミミズク)
さしば	とび	みやこどり (ユリカモメ?, 「カモメ」)
さとがらす (ハシボソガラス?)	にお (カイツブリ)	みやまじとと (ホオジロ類)
さんけい (ヤマドリ・キジ)	にわたたき (セキレイ)	むくどり
しぎ	にわとり	むしくい
しじゅうがら (シジュウカラ)	ぬえ (トラツグミ)	
しとと (=しとど, ホオジロ類)	ぬか・ぬかどり (ベニヒワ)	
しまちどり (チドリ)		
しまつどり (鶺鴒)		

めじろ	やまつぐみ (ツグミ類)	類)
もず	やまどり (ヤマドリ・キジ)	よたか
やまがら	やまばと (キジバト)	るり(オオルリ?、「暗青色
やまがらす (ハシプトガラ	よしすずめ (ヨシキリ類)	の小鳥)
ス?、「山林の鳥」)	よしどり (ヨシキリ類)	れんじゃく(レンジャク類)
やましぎ	よしわらすずめ (ヨシキリ	わし

魚類

あおさば (サバ?)	お=大魚かという)	たこ
あかばな (カンパチ?、「味	おこぜ	たちうお・たち (タチウオ)
の <u>良い海魚</u>)	かいかき (?、「ある魚」)	<u>たなご</u>
あかめだい (マダイ?)	かいらぎ (エイ*、「皮で刀	たら
あじ	の柄を巻く」)	たわらご (ナマコ)
あぶらばえ (アブラハヤ?)	かつお	ちん (クロダイ*)
あみ (甲殻類のアミ類)	かながしら	<u>ちんだい</u> (クロダイ*)
あみわし (?、 <u>訳注はあみ</u>	かます	どじょう
<u>いわし</u> の誤りかという)	かれい・かれ (カレイ)	とびうお
あめ・あめのうお (アメマ	かわえび (「川の蝦」)	なまこ
ス)	きすご (キス)	なまず
あゆ・あい (アユ)	くさび (ベラ類)	なよし (ボラ)
あんこう・あんごう (アン	くじら	にしん
コウ)	くち (=ぐち=イシモチ)	にべ
いか	くらげ	ぬかえび (「小さなえび」)
いぎ (?)	くろだい	はえ (ハヤ*)
いさぎ (?、「海魚」)	こ (海鼠, ナマコ)	はす
いしぶし (イシモチ)	こい	はぜ
いしもち	こだい (マダイ幼魚)	はたさし (「とても大きい
いせごい (ボラ*?)	こち	魚」, カジキ類?)
いだ(ボラ?、「ボラのよう	このしろ	はまち
な川魚」)	さくらだい (マダイ?)	はも
いとよりだい (イトヨリ)	さけ	はらか (マスかうグイ)
<u>いな</u> (ボラ)	さば	はりいお・はいいお (針魚,
いるか	さめ	サヨリ)
いわし	さわら	ひいお(緋魚, シイラ*、「黄
うぐい	しいら	金色の魚」)
うなぎ	しくち (メナダ)	ひお (氷魚=アユ稚魚)
うみのかみ (?、「大魚」)	しび (マグロ)	ひしこ(カタクチイワシ?)
うるるこ (?、「細く小さな	しゃちほこ(シャチ, 「イル	<u>ひだか*</u> (ウツボ, 「細長い
魚」)	カ類」)	毒魚」)
えい*	しろいお (シラウオ?, シ	ふか
えそ	ロウオ?)	ふく・ふくとう (フグ)
えび	<u>すず</u> (サヨリ)	ふな
<u>えびがに</u> (「イセエビまた	<u>すずき</u>	ふなばり (サヨリ)
はクルマエビ」)	すばしり (ボラ)	ふり
<u>えふな</u> (ボラ幼魚)	せいご (スズキ若魚)	<u>ぼら*</u>
おうお(ブリ?、「カツオに	そじ (?、「大きな海魚」)	まくち (ボラ)
似た海魚」, <u>訳注はおおい</u>	たい	ます

まながつお	めぐろ (?)	もろこ
みずがれ (シタピラメ類)	めだか (メダカ*?)	やなぎいお (?)
みみざこ (メダカ*?)	めばる	わたか
めいただき* (メダカ*)	めめじゃこ (メダカ*?)	わに (サメまたはワニ?)

介類

あおがい (アコヤガイ?, 「真珠貝」)	からすがい きくめいせき (菊銘石, キクメイシ, サンゴ類)	せきか (石サンゴ?, 「石の花」)
あかがい (?)	こうず (イシガメ)	たいまい
あげまき	ごうな (寄居虫, ヤドカリ)	たてがい (タイラギ, 「イガ型」の大きな貝)
あこや・あこやのかい (アコヤガイ)	さくらがい	たにし
あわび・あおび (アワビ)	さざい (サザエ)	つべた (ツメタガイ)
いがい*	さんご	どうがめ (スッポン)
いしがめ	しおふきがい (潮吹貝)	とりがい (鳥貝)
いたらがい (イタヤガイ)	ししがい (? , 「トリガイに似た貝」)	にし (アカニシなどの巻貝)
うに	しゃこ* (貝のシャコ?, 「サンゴの類」)	にな (小さい巻貝の総称)
うみがめ	すおうがい (? , 「ホラガイに似た貝」)	ばい*
うみだけ (ツツガキ?, 「白い管」のような海貝)	ずがに (モクズガニ?, 「肢に毛が生えた蟹」)	はがい (「イガイ」)
おうび (「アワビ」)	すずめがい (? , 「小さな二枚貝」)	はまぐり
かいつけ (「アワビ」)	せい (「ウニ」)	はまざわら* (「海綿」)
かき	せがい (「イガイ」)	ほたてがい* (イタヤガイ, 「貝杓子」に用いる)
かに		ほや
かふとがい (ウニ)		ほらがい
かみそりがい (マテガイ類)		まで・までがい (マテガイ)
かめ		みな (= にな, 小さい巻貝)

虫類

あおがえる・あおがえる (アオガエル)	が濃い小虫, 木の芽や草を食う)	または毒トカゲ)
あおばい (キンバエ?)	あま (アメンボ, 「水上をすばやく動き回る虫」)	いらむし (イラガ幼虫)
あおひき* (アオガエル)	あまがえる	うしばい (ウシアブ?)
あしたかぐも (足高蜘蛛, アシダカグモ)	あまきび (「カマキリ」)	うなごうじ (ハナアブ類幼虫, 「人糞中」にいる尾の長い虫)
あしまとい* (足纏い, ハリガネムシ)	あまめ (「フナムシ」)	うまばい (ウマバエ?)
あしもとり (ハリガネムシ, 「あしまといと同じ」)	あまめ (「ゴキブリ」*)	うわばみ (大蛇)
あずきむし (?)	あり	えびむし (? , 「エビの形をした飛ぶ虫」)
あなぐも (ジグモ?, 穴に棲むクモ)	いなご	おながむし (ハナアブ類幼虫, 「人糞中」にいる尾の長い虫)
あぶ	いぬばい (イヌシラミバエ?)	おろち (大蛇)
あぶらむし (「ゴキブリ」*)	いぼじり (カマキリ)	か (蚊)
あぶらむし (アリマキ, 「色	いぼむし (カマキリ)	かいこ・かいご (カイコ)
	いもむし	
	いもり* (ヤモリ, 「ヤモリ,	

かえる・かいる (カエル)	しらみ	ひけしむし (火消虫, ヒトリガなど, 「灯の周りを飛びまわる小虫」)
かげろう	しりばさみ (ハサミムシ, 「尾に釘抜き状のものをもつ虫」)	ひとりむし (火取虫, ヒトリガなど, 「灯の周りを飛びまわる小虫」)
かたつぶり (カタツムリ)	すずむし (スズムシかマツムシ)	ひむし (? , 「馬の蹄をむしばむ虫」)
かつおむし (カツオブシムシ?, 「カツオ*に生じる虫」)	せみ	ひらぐも (ヒラタグモ?, 「厚い袋状の巣を作る」)
かま (=がま, 「カエル」)	たうずら (田鶉, 「食用にするカエル」)	ひる
かまきり	たかたろび (アオガエル?, 「食用の青い蛙, たかたろびきの誤り?」)	ふぎ (浮蟻, 「ハアリ」)
かみきり (カミキリムシ)	たかむし (トノサマバタ?, 「大きなイナゴ」)	ふくろぐも (「ひらぐもの方言」)
からすぐちなわ (シマヘビの黒色個体, 「黒い蛇」)	たに (「ダニ」)	ふなむし
かわず (カエル)	たまむし	へこきむし (カメムシ)
ききりむし (コメツキムシ?)	ちょう (蝶)	へび
きりぎりす (コオロギ)	つづりさせ (コオロギ)	へひりむし (カメムシ)
きりむし (?)	つぼむし (「ダニ」)	へぼ (? , 「ある虫」)
くそむし (ウジ?, 便所に生じる虫)	とかげ・とかき・とかぎり (トカゲ)	ほたる
くちなわ (蛇)	どくはみ (マムシ)	まつむし (マツムシかスズムシ)
くちはみ (マムシ)	とこむし (トコジラミ=ナンキンムシ)	まむし・まぶし (マムシ)
くつわむし	とびむし (? , 「蚤のように跳びはねる小虫」)	みっぽう (ミツバチ*)
くまばち	とんぼう	みのむし
くも	なめくじ・なめくじり (ナメクジ)	みみず
げじげじ (ゲジ)	にゅうどうぐも (オニグモ?, 「丸い体の大クモ」)	むかで
けむし (毛虫)	のみ	めびる (? , 「馬の目に寄生」)
けら	はあり (羽蟻)	やまかがち* (ヤマカガシ)
こうちょう (黄蝶, 「黄色い蝶や蛾」)	はい (蠅)	やまぐも (コガネグモ, 「背に数本の黄筋」)
こがねむし (「翅の光る小さな虫」)	はいとりぐも	やまとんぼう (ヤンマ, 「山林にいる大トンボ」)
こくぞう (コクゾウムシ)	はたおり (キリギリス)	やまばち (スズメバチ?)
こしぼそ (アシナガバチ?)	はち	やもり* : (「灰色の虫」)
こめむし (コクゾウムシ)	はっかじゃ (白花蛇, 漢産)	わくどう (「大きなヒキガエル」)
ささがに (クモ)	ひいる (蛾)	わくひき (ヒキガエル)
じが・じがばち (ジガバチ)	ひが (灯蛾?, 「灯の周りを飛びまわる小虫」)	われから (ワレカラ, 「藻に住む虫」)
しみ (紙魚)	ひき・ひきがいる	
しゃくとりむし・しゃくむし・しゃく* (尺取虫)	ひぐらし	
しょうじょう* (狸々, ショウジョウバエ)		
じょうろぐも* (ジョロウグモ・コガネグモ, 「黄色の縞をもつ大クモ」)		

[リストの注記] (五十音順, 平仮名は『日葡辞書』での名, 片仮名は現和名)

●あおひき: 「あおがえる」の原注に「あおひきと同じ」とあるので, あおひき=アオガエルと

した。結局、あおひき＝あおがえる＝たかたろびき、となる。『日本方言大辞典』（注18）によると、いまアオヒキ・タカタロビキはトノサマガエルの方言なので、『日葡辞書』の「あおがえる」はトノサマガエルを含めた名とも思える。

- あしまとい（足纏い，ハリガネムシ）：線虫の仲間で，カマキリやゲンゴロウの体内で生長し，成熟後は川などで自由生活する。体長が数十センチ～1メートルにもなるので古くから人目についており，898～901年頃成立の『新撰字鏡』に，すでに名が見える。
- い（狷）：「いひ＝狷皮」の項から採録した。
- いがい（貽貝）：『日葡辞書』原著はポルトガル語のイガイに当たる単語をしばしば用いている。確かにイガイを指す場合もあるが，なかには単に二枚貝を意味すると思える例も少なくない。だが，本稿では一応『邦訳日葡辞書』におけるイガイの訳語を活かした。
- いもり：古来，イモリとヤモリは混同されていた。「ヤモリ」の名は，本書で初出。
- エイ：刀の柄を巻く「鮫皮」は，じつはサメの親類筋に当たるエイの皮である。
- かささぎ：『邦訳日葡辞書』は「カササギ」と訳すが，原注に「薄黒い色をした鷺」とあり，現在のカササギとは思えない。『日本鳥名由来辞典』（注5）では，「かささぎ」の項に(1)カササギ，(2)アマサギ，(3)アオサギを指す3例が挙げられているので，ここでは(3)が妥当と考えた。カササギは古く推古6年(598)に新羅から持ち帰られ，難波に放されて繁殖もしていたという(日本書紀)が，やがて絶えたらしい。また，朝鮮出兵の帰還者がカササギを持ち帰って北九州に放ったというが，『日葡辞書』の出版は朝鮮から撤兵したばかりの時期であって，ポルトガル人宣教師はまだ目にできなかったのではないか。したがって，「かささぎ」の語がカササギ以外の鳥に宛てられたとしても不思議ではない。
- カツオ：『料理物語』（1643刊）などの料理書で「鰹」は「鰹節」の意味で用いられている。ここでも，その意味であろう。
- きんけい（錦鶏，金鶏）：中国西南部の山岳地帯に生息し，雄はとても美しいので，数多く持ち渡られた。
- クロダイ：広く使われる別名に「チヌ」がある。
- シイラ：釣り上げたときは金色に輝くが，すぐにあせてしまう。
- しし（獅子）：「ししおう＝獅子王」の項から採録した。
- しゃく：「しゃく」（シャクトリムシ）の項に「尺で鯛を釣る」という例文が出ている。現在の「エビで鯛を釣る」の原型だろうか。
- シャコ：『日葡辞書』には貝類のシャコらしいものと鳥類のシャコは載せられているが，甲殻類のシャコは見当たらない。
- しょうじょう：『堪囊抄』（1446成）に，「酒の香ニ付ク小虫ヲ猩々ト云。猩ハ虫ニ非ズ，獸也。彼ノ獸，酒ヲ好ム故ニ，小虫ノ酒ノ香ニ耽テ倚来ルヲ以テ，推テ猩々ト云ナルベシ」とあるのが初出とされる。現和名ショウジョウバエはこれに由来する。
- じょうびたき：雄の頭上が白いのを「翁」（＝尉）とみて，「尉鶴」と呼んだという。
- じょうろうぐも：「女郎蜘蛛」だが，「女郎」は，初め「じょうろう」「じょうろ」と読み，後に

「じょうろ」となった。そこで、初めは「じょうろぐも」、のちに現和名「ジョロウグモ」と転じた。なお、昔の「じょうろぐも」は、現在のコガネグモも含んでいた(注20)。

- たか：鷹狩に用いる鷹では、雌雄で名称が異なる。「エッサイ(雄)・ツミ(雌)」,「コノリ(雄)・ハイタカ(雌)」はその例で、現在の種名には雌の称を用いる。
- とど：アシカを「トド」の名で呼ぶ地方が少なくない。本書の「とど」もアシカだろう。
- ばい：原注に「殻をコマとして使う」ともある。いわゆるパイゴマ、現在のパイゴマで、用例「バイを打つ」「バイを回す」はこの子供の遊びに初めて言及した記述らしい。
- はっかん(白鷗)：中国南西部に生息する大形のキジで、13世紀には渡来している(注9)。
- ははちょう：ハッカチョウ(八哥鳥)はインド・南アジア・中国南部・台湾に生息するムクドリ科の鳥で、翼の白斑の形から「八八鳥」(ハハチョウ)の名もある。日本には、古く8世紀に渡来の記録があり、室町時代以来かなりの数が持ち渡られた(注9)。
- はまざわら：『時代別国語大辞典・室町時代編』(注10)によると、「ざわら」は「竹を細かく裂いて束ねたもの」で、タワシのように使ったらしい(注21)。
- ハヤ：オイカワ・ウグイ・モロコなど、流線型の淡水魚を示す俗称。
- ひだか：『大和本草』は「ひだか」を「ウナギの類で、鱈魚か」とする。鱈魚は現在のウツボで、方言に「きだか」「きだこ」があり、最普通種ウツボの学名も *Gymnothorax kidako* である。原注に「細長い毒魚」とあり、毒を持つ爬虫類のウミヘビかと初めは思ったが、生息地が南西諸島なので、その可能性は低い。一方、日本近海のウツボ類は有毒ではないが、鋭い歯が恐れられていたので、江戸時代には「毒魚」と表現した例もある。これらを勘案して、「ひだか」をウツボとした。
- ほたてがい(帆立貝)：標準和名のホタテガイは東北地方以北に産する。それ以外の地方では、イタヤガイをホタテガイと称することが少なくない。
- ぼら：「出世魚」で、オボコ・スバシリ・イナ・ボラ・トドなどと生長につれて名が変わる。『日葡辞書』にはこれ以外の名称もみえる。
- ミツバチ：「みつばち」の項は無く、「蜜蜂」を音読みした「みっぽう」だけである。
- めいただき(目戴)：メダカ^{あいのう}の古称。15世紀の『塙囊抄』に初めて登場し、江戸時代初期には「メダカ」に席を譲ったようだが、いまでも方言として残る。→次項参照
- メダカ：原注には、「ある魚」とあるだけで、海産魚か淡水魚かの区別も、大きい小さいかの特徴も、別項にあるメダカの古名「めいただき」の名も記されていない。一方、「めいただき」の項には「小さな川魚」とあるが、「メダカ」の名についての記載は無い。したがって、厳密には「めだか」が現和名のメダカを指すとは断定しかねるので、「?」を付した。
- もま：原注に「大きなコウモリ」とある。すでに、琉球からオオコウモリが持ち込まれていた可能性もあるが、モモンガ・ムササビとコウモリは時に混同されたので、モモンガの別称の一つ、「モミ」が「もま」に転じたとも考えられる。
- ヤギ：「やぎゅう」の原注に、はっきり「雄または雌のヤギ」と記されている。現在の和名ヤギは、この「やぎゅう」(野牛)から転じたものらしい。

- やまかがち：元来は大蛇の意味だが、のち現在のヤマカガシを指す語に変わった。
- やもり→いもり

◎採録された動物名の特徴

『日葡辞書』は当時のイロハ引辞書である『^{せつよう}節用集』の類を参照しているが、『節用集』は本格的には漢和辞典なので、漢語と結びつかない和語が落ちてしまっている。それに対し、本書は市井の日常的な呼び名、それも従来採録されていなかった語も取り入れているので、動物の和名は『節用集』よりはるかに多い。以下、新出語（波線を付した）を中心にいくつかの例を抜きだしてみるが、以後も広く使われている品名やその原型も少なからず存在する。

あこやのかい (アコヤガイ), あしまとい (足纏い, ハリガネムシ), あぶらむし (アリマキ), あぶらむし (ゴキブリ), あま (アメンボ), あまめ (ゴキブリ), あまめ (フナムシ), いな (ボラ), からすがい (烏貝), かわらひわ (河原鷄), きくいただき (菊頂), げじげじ (ゲジ), こうず (イシガメ), こくぞう (コクゾウムシ), しゃくとりむし (尺取虫), しょうじょう (猩々, ショウジョウバエ), じょうびたき (尉鷄), じょうろぐも (上臈蜘蛛, ジョロウグモ), しりばさみ (尻挟み, ハサミムシ), つぼむし (ダニ), どうがめ (スッポン), とこむし (床虫, トコジラミ), はいとりぐも (ハエトリグモ), ひけしむし (火消虫, ヒトリガなど), ひとりむし (火取虫, ヒトリガなど), ひみず (日見ず, ヒミズ), ふくろぐも (袋蜘蛛), へこきむし (屁放虫, カMEMシ?), ぼら (鰻), めいいただき (目戴, メダカ), めだか (目高, メダカ), やもり (屋守), りす (栗鼠) など。

前記リストにあげた動物名の語数を数えてみると、獣類60, 禽類178, 魚類120, 介類53, 虫類134で、総計は545語となった。ただし、「あおがえる」「あおがいる」のように発音がほとんど同じでも、原著で別項に挙げられているものは、それぞれ1語と数えている。

これをみると、日常生活で身近かどうかをほぼ反映しているように思われる。鳥の数がやや多いが、本書は鷹狩に詳しいので、その獲物の名称も採録されたからだろう。また、飼育されている鳥を目にする機会が少なくなかったことも一因と考えられる。

収録語数は多くなったが、『節用集』などと同じく、ある動物群の名(類名)はあっても、個々の品名はほとんど収録されていない。たとえば、セミはあるが、個別品名はヒグラシだけ。チョウとガ(ひいる)はあるが、明確な個別品名は一つも無い。例外は鷹とクモの名である。鷹は、鷹狩についての詳細な聞き取りが行なわれたからであろう(そのような聞き取りをした理由は不明)。クモは「あしたかぐも・あなぐも・じょうろぐも・にゅうどうぐも・はいとりぐも・ひらぐも・ふくろぐも・やまぐも」と多出するが、身近に多いし、飛びまわらないので特徴が見分けやすく、個別的認識が進んでいたのかと思う。

一方、次の動物を指す語は『日葡辞書』に見当たらない——イソギンチャク, カブトガニ, カブトムシ, クマゼミ, シジミ, タカラガイ, ツクツクボウシ, タツノオトシゴ, タンチョウヅル, チン(狎), ハツカネズミ(注11), ヒトデ, フジツボ。

イソギンチャクやヒトデ, タツノオトシゴが無いのはともかく、万葉集に詠われているシジ

ミヤ、『倭名類聚抄』に「くつくつぼうし」の名で収録されているツクツクボウシなどが含まれていないのは、いささか腑に落ちない。なお、サンマやアサリ、シャコ(甲殻類)は現在の我々にはなじみ深いですが、これらの名称が現われるのは江戸時代に入ってからで、『日葡辞書』にはまだ登場していない。

◎幾つかの動物について

最後に、『日葡辞書』に収録されている品名のうち、幾つかについて多少細かくみておきたい。ただし、リスト後の注記と重複する場合もある。

①海外産の鳥類

『日葡辞書』には、外来の鳥類(家禽類を除く)の名が7件含まれている—孔雀、鸚鵡、音呼(インコ)、鷓鴣(シャコ)、錦鶏(キンケイ)、八哥鳥(ハッカチョウ)、白鷺(ハッカシ)。このうち孔雀は推古天皇6年(598)に新羅から献上され、鸚鵡は大化3年(647)に同じく新羅から入る。八哥鳥は天平4年(732)に、白鷺は文永10年(1273)までに渡来し、以来みな時折持ち込まれていた(注9)。シャコ(鷓鴣)もまた平安時代以来名が知られているが、これは漢土の文学作品に登場するからで、その頃にシャコそのものが渡来していた記録はないようである。しかしながら、16世紀後半になるとポルトガルなどや明国の船が日本に来るし、やがて日本人も東南アジアに渡海するようになって、交流が盛んになる。音呼、鷓鴣、錦鶏も含め、海を越えて持ち込まれた珍奇な鳥類が豪商や戦国大名の愛玩物となっていたに違いない。『日葡辞書』の記録は、それを反映しているのだと思われる。

②メダカ

メダカには多数の方言が残る(注12)が、その一つに「メイタダキ」という語がある。メダカの大きな眼が目立つこと(注13)から、「目戴き」の名が生まれたらしい。これがメダカの古名であり、管見に入ったもっとも古い事例は文安3年(1446)成立の『塩あいのう囊抄』で、「鱒」に「めいただき」の仮名が振られている(注14)。続いて享徳元年(1452)の『精進魚しょうじん類物語』では「目戴」、文明6年(1474)成立という『文明本節用集』では「鱒」「鰻」に対して同じく「めいただき」の読みが付されている。『日葡辞書』はそれを受け継いで「めいただき」の語を所収しているが、その原注に「小さな川魚の名」とある。一方、同じ『日葡辞書』に、「メダカ」の称が初めて登場する。リストの注記で述べたように、「めだか」の項の内容が乏しいので、それが今日のメダカだと確定はできないが、おそらく間違いないだろう。メダカは「目高」で、やはり目の位置に基づく名であるが、「めいただき」よりわかりやすいからか、以後徐々にメダカの名が広まって今日に至る。なお、『日葡辞書』に所収されている「みみざこ」「めめじゃこ」の名もメダカを指す語かもしれない。今日も「ミミザッコ」「メメジャッコ」が方言として残るからである(注6)。

③アコヤガイ

真珠は古くから日本の名産品だが、古代にはアワビ(鮫)から採取する「鮫玉」が主流で、アコヤガイの真珠が登場するのは平安時代以降らしい。承保3年(1076)に宋への贈呈品に「阿

久也玉」を選ぶとの記事があり（百鍊抄），また「あこやだま」（古今和歌六帖）や「阿古屋とる井貝」（山家集）の表現が見られる（注15）。「あこや」の由来は未詳だが，このように平安時代には真珠を採る貝の名あるいは真珠自体の別名として「あこや」が現われる。そして，現在のアコヤガイに通じる「あこやのかい」という形は、『日葡辞書』が初めて記録した。

④黄蝶

江戸時代末までの文献の「蝶」は，いまとは異なり，蝶とともに蛾も含む概念であった。本書に出る「黄蝶」も現在のキチョウではなく，黄色い蝶と蛾の総称と考えられる。そして平安時代末期以降，黄蝶の出現が戦さの起こる予兆と受け取られていたので、『吾妻鏡』や『明月記』などに多くの記録が残っている（注16）。たとえば，『吾妻鏡』の建保元年（1213）8月22日条には「鶴岡上ノ宮〔鎌倉鶴岡八幡宮〕ノ宝殿ニ黄蝶大小群衆ス」（読み下し），同宝治2年（1248）9月7日条には「黄蝶飛び行き，由比ノ浦ヨリ鶴岡ノ宮寺并ニ右大將軍家法華堂ニ至ルマデ群ガリ亘ル」などとある。『日葡辞書』には古典に現われる語も数々収録されているので，「黄蝶」も上記のような個所に用いられていた可能性が高い。ハアリ（羽蟻）もまた凶兆とされていたらしいので，本書に「はあり」とその異称「ふぎ」（浮蟻）の2語が採られているのは同様な背景によると思われる。

⑤床虫

吸血性寄生虫のトコジラミ（床虱，別名南京虫）は幕末に日本へ初めて上陸したといままで言われてきたが，『羅葡日辞典』（注11）および『日葡辞書』で床虫をポルトガル語で「トコジラミ」と明確に記しているのだから，侵入は室町時代に遡ると考えられる。ただし，トコジラミが広範囲に拡まることはなかったのだろう，江戸時代の本草書・医学書などには取り上げられていないようである。そして，開国後に再侵入して拡まったらしく，明治10年代後半には「南京虫」の名で新聞記事などにしばしば登場するにいたる（注8）。一方，現在の標準和名「トコジラミ」は明治17年（1884）刊の『生物学語彙』（注17）に初めて登場するが，「トコムシ」は今も方言として挙げられており（注18），それに由来したのだろう。

⑥アリマキ

アリマキは半翅類のアブラムシ類の別称だが，その別称の由来を物語る記事が『日葡辞書』にある。それは「あり」の項で，例文の一つに「Arima qiga suru（蟻まきがする）」とあり，そのポルトガル語訳に「蟻が山をなして重なり集まる」とある。これによると，「ありまき」は最初動物名ではなく，蟻が群がる状態をいう表現だった。ところが，葉や茎でよく見られるように，半翅類のアブラムシが出す蜜を求めてアリが密集する，つまり「蟻まき」状態となる。それが転じて，「アリマキ」がアブラムシの別称となったのであろう。もっとも，『日葡辞書』では，まだ「アリマキ」を虫の名とはしていない。『日本国語大辞典』によれば，「アリマキ」が虫の名として初めて所収されるのは17世紀も半ばの俳句集『玉海集』らしい。なお，アリマキを指す「アブラムシ」の語は，古く13世紀後半成立の『塵袋』に登場している。

⑦ゴキブリ

『日葡辞書』には，現在のゴキブリを指す語が「あぶらむし」「あまめ」と二つ挙げられてお

り、いずれも新出語のようである。ゴキブリは古くは「ツノムシ」「アクタムシ」と呼ばれていたが、江戸時代に入るとアブラムシのほかに「ゴキカブリ」の新称が現われた。ゴキは御器、つまり食器で「食器かじり」の意味である。今は知らぬ者もない「ゴキブリ」の名は『生物学語彙』(注17)に初めて現われるが、これは「ゴキカブリの誤記か誤植だった可能性が高い」と小西正泰氏は云われる(注19)。どうやら、これが事実らしく、その誤記が以後広まってしまったのである。

⑧アオキ

『日葡辞書』に初出語が多いという事情は植物でも同じらしい。その一つとして、「アオキ」(青木)の初出を挙げておく。もっとも、本書「あおき」の項の原注は「木の一種、葉は傷を癒す力がある」だけで、樹形・葉・花・果実などの特徴は記されていない。しかし、現代の植物書に「アオキの葉をもんで腫れ物・火傷・切り傷・むくみに貼るか、葉を黒焼きにして服用する」旨の記載があることを考慮すると、『日葡辞書』の「あおき」が現在のアオキであることはまず間違いない。これまでは、貝原益軒著『花譜』(元禄11年=1698刊)にアオキの名が初出するとされていたが、それよりほぼ1世紀早くアオキの名が記録されていたことになる。

謝 辞

本研究にあたって、虫類、とくに昆虫については、田中 誠氏から多くのご教示をいただいた。心から御礼を申しあげたい。

(注1) 原題：“Vocablario da Lingoa de Iapam com a Declaracao em Portugues”

(注2) 青葉 高、『野菜の日本史』、八坂書房、1991年。

(注3) 土井忠生・森田武・長南 実 編訳、『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年。

(注4) 森田 武 編、『邦訳日葡辞書索引』、岩波書店、1989年。

(注5) 菅原 浩・柿澤亮三、『日本鳥名由来辞典』、柏書房、1993年。

(注6) 洪澤敬三、『日本魚名集覧』(『日本常民生活資料叢書』、第3巻)、三一書房、1973年。

(注7) 川名 興、『日本貝類方言集』、未来社、1988年。

(注8) 『日本国語大辞典』、小学館、2000~02年。

(注9) 磯野直秀、『日本博物誌年表』、平凡社、2002年。

(注10) 『時代別国語大辞典・室町時代編』、三省堂、1985~2001年。

(注11) 『羅葡日辞典』→金沢大学法文学部国語学教室編、『ラホ日辞典の日本語・索引編』、ラホ日辞典索引刊行会、1971~73年。『羅葡日辞典』は1595年、『日葡辞書』より先にイエズス会宣教師により天草学林から刊行された。『日葡辞書』と異なって動植物名が少ないが、「はつかねずみ」のほか、「とこむし」(トコジラミ)と「はまぎわら」(海綿)が初出する。このうち、「はつかねずみ」は『日葡辞書』には所収されていない。

(注12) 注6 文献。小野蘭山著『本草綱目啓蒙』も参照されたい。

- (注13) 『大和本草』に「首大ニ、目高ク出タリ」、『本草綱目啓蒙』に「両大目、相並テ、タカク出」とあるのが、メダカの印象をよく表わしている。
- (注14) 2巻本『色葉字類抄』の尊経閣蔵古写本（影印本、古辞書叢刊、雄松堂書店、1975年）には、「目上」の語に「めいただき」とある。ただし、増補本という『色葉字類抄』3巻本・10巻本にはこの語が無い。前記2巻本の奥書によると、編者橘忠兼の稿本を写したものを、さらに正和4年（1315）、応永30年（1423）、永禄8年（1565）と継写したとある。したがって、『色葉字類抄』の2巻本が天養～長寛年間（1144～65）に記された後に、「目上」の語が転写の過程で追加された可能性が大きい。そのため、ここでは2巻本『色葉字類抄』の用例を挙げなかった。
- (注15) 梶島孝雄、『資料・日本動物史』、八坂書房、1997年。
- (注16) 松井松太郎、黄蝶の古記録、採集と飼育、27巻、384-391、1965年。注9文献参照。
- (注17) 岩川友太郎編、『生物学語彙』、岩川友太郎出版、1884年。
- (注18) 『日本方言大辞典・索引編』、小学館、1989年。なお、『時代別国語大辞典・室町時代編』（注10）によれば、「トクムシ」の呼び方が鹿児島県と対馬に今も残る。
- (注19) 小西正泰、『虫の文化誌』、朝日選書、1992年。引用文の圏点も小西氏による。
- (注20) 新海 明・川名 興、栗本瑞見著『千虫譜』の中の「蜘蛛」について、KISHIDAIA, 83号、11～25、2002年。
- (注21) 小野蘭山著『南楼随筆』（東洋文庫蔵）に「ウミヘチマ」（海綿）について述べた次文があり、「サワラ」の名に触れる：「ウミヘチマ 勢州二見ニハカホチト云、越前敦賀ニハ水スイト云、九州ニハイソザワラ、又イソザウラトモ云。ザウラハ縄ヲツクネテ [丸めて] 物ヲ洗フモノナリ。サワラトモ云、海ワタト云。加賀金沢ニテハシミセント云。薩州ニハ、コノクズケタル [砕けたもの] ヲ波ノ花ト云、毬中ニ入レ、ナカ入トス。ヨリハズミ [弾み]、高ク上ルナリ。蜜産ノスボンスハ厚サ寸許、柔ニシテ綿ノ如シ……」。本誌本号の拙著「小野蘭山の随筆」、p.6・p.8（追記）を参照。